

教区だより

2021

9月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第378号

再開にあたって

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなつた現実には直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられると思います。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願ひながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思ひます。

このような願いを引き受け『教区だより』の発行を再開してまいります。



無知とは 知らないことを 知らないこと

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

1 頁 「ことば」

2 頁 **連載** 悲しみが通じあう時 ―愚禿悲歎述懐を通して―

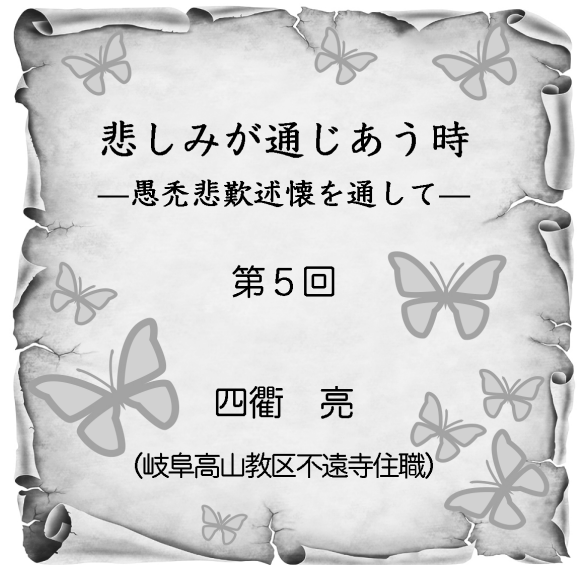
《第5回》 よつつじ 四衢 あきら 亮 氏

3 頁 「今、この時に、親鸞聖人に遇う」 えま 江馬 まさおみ 雅臣 氏

4 頁 教務所からのお知らせ

イマダカラ

教化推進本部 ふしなみ 藤浪 ゆう 遊



無慚無愧のこの身に

まことのころはなれども

弥陀の回向の御名なれば

功德は十方にみちたまう (聖典五〇九頁)

「慚」は、心を切られるような思いをするということから「はじる」という意味を持ちます。「愧」は、鬼は平常でないということを表し、心中に平常でないものを感じて、「はじる」の意味を表します。孟子の名言で有名な「君子の三楽」の中に、「仰いで天に愧じず、俯して人に作じざるは、二楽なり」という言葉があり、公明正大で仰いで天に恥ずかしいところがなく、俯して他人に対して

恥ずかしいところがないのは、第二の楽しみとされています。

ただこの和讃は、徳行ともに備わり人格優れた「君子」を目指す歩みに耐えられないことを問題にしたのではないでしょう。

この「慚愧」は、親鸞聖人が『信巻』に引用されている『涅槃経』に出てくる「慚愧」を踏まえられてのことです。それは、王舎城の事件において、幸のない父王頻婆沙羅を殺害した阿闍世が、その罪に悔熱を生じて懊悩するのに対し、大医耆婆が語る言葉です。

二つの白法あり、よく衆生を救く。一つには慚、二つには愧なり。「慚」は自ら罪を作らず、「愧」は他を教えて作さしめず。「慚」は内に自ら羞恥す、「愧」は発露して人に向かう。「慚」は人に羞ず、「愧」は天に羞ず。これを「慚愧」と名づく。「無慚愧」は名づけて「人」とせず、名づけて「畜生」とす。

(聖典二五七頁)

この慚は、「内に自ら羞恥す」とありますから、自分で許せない自分を恥じるということです。愧は、「他を教えて」「人に向かう」と表されますから、他人とも共有できる人の行いの原理原則から外れたことを恥じるという意味合いです。

阿闍世の場合、提婆にそそのかされて父王を殺

してしまったことを、「しまった、取り返しのないことをした」と気づき、その自分を許せなかったのでしょう。またその行為は国の人々にも決して支持されないことであり、人の道に外れたことだと恥じたのでしょう。そしてその気持ちがあるのが「人」であり、それがいないのは人ではないと耆婆は語り、その言葉でその阿闍世を認め、釈尊のもとへ共に行こうと勧めるのです。

ただ注意しなければならないのは、「慚愧」は苦しみ病む阿闍世を受け止め、認め、釈尊のもとへ歩を進める中での言葉であり、教えに出会うための必須のものだということではありません。しかし私たちは、この慚愧を人間であることの条件で、教えに出会う必須のものであるように考えがちです。

さらに、そのことにまじめであればあるほど「慚愧に耐えません」と言えることを尊び、罪深さへの自覚があることで、自分の正しさを認めてもらいたいという心が動きがちです。そしてその心は、他者に「慚愧」や「罪深いという自覚」を押しつけ、「自分を問え」「悪人だろ」「慚愧せよ」という言葉で教化しようとする意識にさえなります。

その意識が「まことのころなし」と破られ、その姿を「無慚無愧のこの身」と知らされる。それが「十方にみちる」御名の功德なのでしょう。

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」



「ホッと出来る場が必要」

岐阜高山教区益田組賢喜寺 江馬雅臣

「仏教やお寺には全く興味が無い。お前はお経を読むだけで生活できるのだから楽でいいし、広い生活空間もあるから羨ましいよ」幼馴染の先輩から直接言われた言葉だ。

言い当てられた私は、返す言葉が見つからなかったことを今でも覚えている。

私は、お寺という場所を私有化し、日々の法務をいかにこなすかという事しか考えていなかっただけに、先輩の言葉は重く厳しいものだった。

◆立ち上がらせる存在

その先輩との話を、当時の教区駐在教導さんに懇親会の席で打ち明けたこともあったからなのか、数日後に駐在教導さんから一本の電話が入り「お寺の子ども会を開設する施策があるのだが、やってみないか」という話があった。当時、やる気も無く、子ども会開設をすんなりと引き受けることが出来なかったが、「俺も一緒にやるから」という駐在教導さんの強い熱意に押され、断る理由も見つからず仕方なく二〇〇六年十月に開催することを決めた。

不安しかない中で、お寺の役員さんの協力で案内チラシを配り、当日は十名の子どもたちが参加してくれた。境内に一番乗りの男の子が入ってきた時、喜びのあまりハイタッチを試みるも軽かわされたことは今でも忘れることが出来ない。また、いつも口うるさい総代さんが「ワシもカレー作りの薪割りをするぞ」と待っていましたとばかりに駆けつけ、今でも「あれやれ、これやれ」と私の歩みを止めさせない尊い存在だ。

◆動きながら学ぶ

スタートした月一回の子ども会だが、その後も私の歩みは空回りの連続。常に子どもたちに満足感と達成感を持ってもらうことを意識するあまり、遊びやモノづくりなど当日の企画ばかりに力を入

れすぎて、子どもたちに私の思いを押し付ける場となっていた。当然のことだが、子どもたちからは「お寺も学校みたいで疲れる」「面白くない」という声も挙がり参加者は減るばかり。妻からは「他所の子に一生懸命になれるのなら、我が子にもきちんと向き合ったらどう」と言われる始末で、苦しい思いばかりだ。そんな失敗を繰り返しながらも、ご門徒さん、地域の方々、家族の支えによって十五年間続けられている。

◆人があたたかな場をつくる

当時、小学生だった参加者も今では立派な社会人だ。私の地域は過疎化が進み、高校卒業と同時に、多くの若者が故郷を離れ都市部へ進学・就職する。その一方で、家庭の事情で地元就職する人、夢や希望を抱いて都会へ出たが挫折し帰ってきた人もいる。その二十代の若者たちと仏教青年会として聞法の間を開いている。お勤め・法話・座談会、特別なことはやっていない。だけど、若者たちはみな「お寺に来ると何だかホッとする」と言う。それは、幼い時から本尊に手を合わせ念仏申し、自分自身にであう場として大切にしてくれているからである。聞法の間には、今も彼らによって、一人ひとりを同朋として見出していく親鸞さまの精神が流れている。

教務所からのお知らせ

《経常費の早期完納について》

経常費の早期完納締切期日は二〇二一年九月三十日(木)です。

なお、本願部(参拝接待所)で相続講金(真宗本願収骨)、読経志(永代経・申経)等を直接納金された場合は、各寺の御依頼額には算入されません。予め教務所を通して手続きください。

郵便振替による送金の場合の口座番号・加入者名は左記の通りです。

・口座番号 0096018118967

・加入者名 真宗大谷派京都教務所

※払込用紙(振込料教務所負担)をご希望の方は、教務所までお申し出ください。

《教務所員の異動について》

六月三十日付で小代亨次長が退職し、内麻頭祐次長(前京都教務所主計)が着任いたしました。また、八月一日付で矢木春香主事が京都教務所主計として異動となり、仁宗寿主事が(前財務部主事)が着任いたしました。

《真宗の仏事の回復に関する書籍の紹介》

『誰のために葬儀を勤めるのかー弔いの原点ー』

海 法龍 講述 800円(税込み)

「葬儀を勤める」という本質を確かめていく一冊。購入希望の方は真宗大谷派東本願寺真宗会館までお問い合わせください。

電話 〇三―五三九三―〇八一〇

イマダカラ

今、メジャーリーガーの大谷翔平選手と棋士の藤井聡太二冠の二人から目が離せない。大谷選手は、二刀流に懐疑的な周囲の中であって「先入観は可能を不可能にする」との言葉を大事にしながら、体作りや練習に励んできた。藤井二冠は、将棋の神様への願い事を尋ねられた際に「棋力の向上を」などではなく「(一局)お手合わせを」と応じた。この二人の言動からは、勝ち負けや金銭を超えて、野球や将棋の本質(真理)に迫りたいという思いが強く伝わってくる。

まぶしい二人とは対照的に、五十肩と老眼に悩まされる私は、歳を重ね「当てが外れる」ことが増えてきた。老・病・死に押しつぶされ「あきらめ」と「愚痴」で人生が終わることに漠然とした不安と恐怖を覚えている。そんな中、以前聞かせていただいた「『自分の生き方はこれでいいのか』という問いが、一人一人のいのちの深いところで疼いているのではないのでしょうか」との言葉が思い出される。「自分の生き方が気にかかる」からこそ、大谷選手や藤井二冠のひたむきさや純粋さに触れると、普段は隠れている「いきいきと生きたい」との根源的な欲求が呼応し、表に顔を出すのではないだろうか。彼らが多くの人を引きつける理由の一端もここにあると思う。

そして、自分の生き方が気にかかり、自分の生き方を問わずにおれない私たちに、聴聞の場はすでに用意されている。あきらめと愚痴が口をつく身を教えは照らしてくれる。当てが外れる身を教えは照らしてくれる。あきらめや愚痴がそのまま終わるのではなく、自分の生き方への問いになることの大切さを改めて思う。いきいきと、それぞれの道を真摯に歩む二人の青年から目が離せない。

(教化推進本部 藤浪 遊)

編集後記 the editor's note

『教区だより』の編集をはじめ、リモートによる会議にもずいぶん慣れてきました。地元での輪読会もリモートでできるのではないかと何度かやってみましたが、思っていたほどうまくいかないように感じます。普段来られない人が参加できるという利点はとても大きいのですが、やはり、顔をあわせて、ああでもない、こうでもない、と、懇ろに言葉確かめていくことの大切さを、あらためて思います。

教区教化においても、同様のことがいえます。先日、『京都教区坊守会だより』で、リモートだから研修会に参加できたというお声を拝見しました。男女共同参画の視点から、また、広域にまたがる教区特性からも、リモートによる教化事業は、今後も継続していくべきであると考えます。一方で、ときには場をともにして、一緒に聞いていく、互いに聞きあっていく場をどこまでも大事にしていくことが、私たち教区人に願われているように思います。

(編集委員：比叡谷 真)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第378号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2020 (令和2) 年9月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

